

BEVI を用いたオンライン留学の効果測定

ーコロナ禍でのグローバル人材育成の試みー

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun

Research Center for Higher Education

Tokushima University

徳島大学高等教育研究センター

学修支援部門国際教育推進班

橋本 智

HASHIMATO, Satoshi

Research Center for Higher Education

Tokushima University

徳島大学高等教育研究センター

学修支援部門国際教育推進班

要旨：2020年度のコロナ禍で本学は夏休みに先駆的にオンライン留学を実施（本学から44名の学生が参加）したが、グローバル人材育成という観点において、このオンライン留学にはどれほどの効果があったのかをBEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) のツールを用いて客観的に測定した。「社会文化的オープン性」で一定の効果が見られたものの、「他者理解」や「自己認識」の涵養という面ではバーチャル空間で行うプログラムとしての課題がみえた。ニューノーマルとしてのグローバル教育を行っていく上で、今後の指針となる研究結果が得られたと思われる。

キーワード：オンライン留学、グローバル人材育成、短期留学プログラムの効果測定、BEVI

1. 研究の背景と目的

多方面において、国境や文化、言語を超えた交流の進むグローバルな時代を迎えている。大学等の高等教育機関では、その時代の変化に対応できる学生、いわゆるグローバル人材と言われるスキル・コンピテンシーを備えた学生の育成を求められている。このグローバル人材は、グローバル人材育成戦略（文科省 2012）によると、〈要素Ⅰ〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素Ⅱ〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を兼ね備えた人物であると定義づけられている。

日本の多くの大学では、このグローバル人材育成のために、海外留学制度や異文化理解に関する国際プログラムが積極的に行われている。以前は長期留学が主流であったが、近年は夏休みや春休みを利用して行う短期留学プログラムの開発が進み、その参加者数が大幅している（奥山 2017）。筆者らの勤務校である徳島大学においても、高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班（インターナショナルオフィス）では毎年夏休みと春休みの長期休暇を利用して、全学部学科の学生を対象に1ヶ月以内の短期海外留学プログラムを企画し、海外の大学・教育機関へ学生たちを派遣している。

永井（2018）が指摘している通り、これら短期留学プログラムは、グローバル人材育成において上記〈要素Ⅰ〉の語学力は測定可能であるものの、〈要素Ⅱ〉や〈要素Ⅲ〉の語学力以外の面である異文化理解や日本人としてのアイデ

ンティティーの変化については、測定が非常に難しいのが現状であり、各大学等では留学の事後アンケート等の主観的評価や満足度調査が主にその効果測定に行われている（大西 2019）。その中、近年、その短期留学による学生の情動的・心理的变化を客観的に評価するBEVI⁽¹⁾ (The Beliefs, Events, and Values Inventory) というツールが注目されている（西谷 2017）。

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、いくつかの大学では海外派遣の代替として短期のオンライン留学⁽²⁾が導入されているが、本学も海外の複数の大学と共同で夏休みにオンライン留学プログラムを実施した⁽³⁾。このオンライン留学は、コロナ禍で海外派遣留学に代わるプログラムとして導入された新しいプログラムであるため、管見の限りでは、BEVIを用いた効果測定の研究はほとんど行われていない⁽⁴⁾。今後、派遣型留学の代替として、オンライン留学がますます増えていくことも予想される中で、コロナ禍で実践されているオンライン留学の効果の検証は重要である。

そこで、本論文では、短期のオンライン留学を通じてプログラムの参加者にはどれほどの心理的な変化が生じているかを、上記BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) を用いて測定する。特に、グローバル人材に必要な要素のうち、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の面で効果があったのかを明らかにすることで、今後のグローバル人材育成を目的とするオンライン留学プログラムの改良に繋げていく。

2. 研究方法

2.1 研究対象プログラム

徳島大学インターナショナルオフィスは毎年夏休みには海外の協定大学等に学生を派遣していたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、2020年度夏休みの全ての短期留学プログラムの中止を決定した。グローバル人材育成教育を止めないように、オンラインで留学プログラムを提供できないかと5月に協定大学の南イリノイ大学(SIU)⁽⁵⁾にオンライン留学の共同開発を持ちかけ、すぐに開発を行った。また、学内のニーズ調査⁽⁶⁾に基づき、韓国の協定大学である慶北大学(KNU)⁽⁷⁾とは「韓国語・韓国文化に関する内容のオンライン留学プログラムを、台湾の淡江大学(TKU)⁽⁸⁾とは中国語・台湾文化に関する内容のオンライン留学プログラムの共同開発を行い、合計3つのオンライン留学プログラムを学生たちに提供することができた。

上記の3つのオンライン留学プログラムは、具体的には「夏期南イリノイ大学(SIU)4週間英語・アメリカ文化プログラム」、「夏期慶北大学(KNU)2週間韓国語・韓国文化プログラム」、

「夏期台湾・淡江大学2週間中国語・台湾文化プログラム」である。内容は、語学学習だけではなく、学生交流も盛り込み、グローバル人材に必要とされる〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を涵養できるように工夫している。

1つ目の南イリノイ大学のプログラム(以下「SIU」とする)については、期間を長く設定して、1日の学習時間も長くし、できるだけ留学に近い体験ができるようにという観点で開発した。コロナ禍で本学の2020年度の前期授業の終了が通常よりも遅くなったため、8月中旬開始にし、期間は4週間、土日以外毎日4時間授業を行うようにした。アメリカのイリノイ州とは時差が17時間あるため、授業開始を日本時間20時開始(イリノイ州6時開始)に設定した。8月は午前中に実習や集中講義等が入っている学生がいるため、学生たちが参加しやすいように配慮した。授業は、ZOOM⁽⁹⁾を用いて行われ、SIUの英語センターのネイティブ講師からの授業と、コロンビアやサウジアラビアの大学から参加する学生達との交流で基本的に構成されている。クラスは、TOEICや事前の面接によりレベル分けされ、本学学生と海外大学の学生の人数比率はほぼ同数だった。授業料は約8万円で、本学から3万円の奨学金(返済不要)を支給した。

慶北大学のプログラム(以下「KNU」とする)

については、韓国語未習者も多かったことから、学生が参加しやすいように2週間の比較的短いプログラムにした。先方大学の学年暦と本学の前期試験期間を考慮し、KNUのプログラムは8月中旬開始で8月末に終了とした。授業時間は、月曜から金曜まで毎日午後1時(韓国との時差なし)からの4時間で、基本的に2時間はKNUのネイティブ講師から韓国語を学び、次の2時間はKNUの学生のリードで英語を用いた文化交流を行う形となっている。授業料は約2万円で、本学から1万円の奨学金(返済不要)を支給した。

淡江大学のプログラム(以下「TKU」とする)についても、学生に大きな負担とならないようにするため2週間の短いプログラムにした。9月上旬から中旬まで、月曜日から金曜日の毎日9時(台湾は午前8時)から3時間実施した。2時間はTKUのネイティブ講師による中国語の授業で、1時間は学生交流となっている⁽¹⁰⁾。クラスは事前の面接試験と筆記試験によりレベル分けした。授業料⁽¹¹⁾は約6万円から約8万円で、本学から3万円の奨学金(返済不要)を支給した。

2.2 調査対象者

本調査の対象者は、2020年度夏期オンライン留学プログラムに参加した本学学生全員で、44名である(1名の学生はKNUとTKUの両方のプログラムに参加)。参加者は全員インターナショナルオフィスの担当教員と個別面談をし、詳細説明を聞いて納得した上で参加している。各プログラムの人数の内訳は以下の表1の通りである。

表1

オンライン留学プログラム	本学学生の参加者数
SIU (英語・アメリカ文化)	27名
KNU (韓国語・韓国文化)	10名
TKU (中国語・台湾文化)	7名
合計	44名

SIUの参加者の特徴としては、英語圏に海外留学をしたかったがコロナ禍で海外渡航ができなかったため、オンラインでも海外文化に触れたり英語力を伸ばしたりしたい学生が多いことである。ほとんどの学生は海外渡航経験があり、海外での異文化接触の経験はあると思われる。一方、英語に苦手意識を持っており、

オンラインで安く参加できる機会を利用してそれを払拭したいという気持ちで参加した学生もみられる。また、これまで時間的余裕がなく参加できなかった医学部の学生なども含め、すべての学部から参加しているというのも大きな特徴である⁽¹²⁾。

KNU は、K-POP が好きで韓国語を勉強してみたいという学生やすでに独学で韓国語を勉強しているという学生がほとんどである。また費用も安くオンラインで気軽に参加できるので申込んだという学生が多い。

TKU は、参加費用が他に比べて高いためか申込数は 3 つのプログラムの中で一番少ないが、その分、中国語を伸ばしたいという高い意欲を持った学生が多い。中国への長期留学経験があり、さらに成績を伸ばしたいというモチベーションで参加した学生もいる一方、1 年生で中国語を始めたばかりであるという学生も複数いる。

2.3 BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory)

BEVI は 1990 年初頭に米国の臨床心理学者である Craig N. Shealy らにより開発された心理尺度を測るオンラインテストである。信念・価値また人生の出来事についての質問を行い、その回答から、「誰が、なぜ、どのような状況で、何を学習したのか」を明らかにすることができ、異文化交流体験の評価で柔軟に使用できるように質問が構成されている (Beliefs, Events, and Values Inventory, 2018)。日本においては、2017 年度に広島大学が BEVI-J として日本語版を開発したことで、広島大学を中心に本学を含めて多くの大学で採用され、日本人学生を含めて数万件のデータが蓄積されている。

受検はオンライン上で行われ⁽¹³⁾、40 項目の個人についての背景質問 (性別、学歴、宗教など) と 185 のテスト項目の質問で構成され、所要時間は約 30 分である。テスト項目の回答の選択肢は、すべて 4 段階リッカート尺度となっており、受検者は「強く同意する」「同意する」「同意しない」「強く同意しない」から 1 つ選ぶ。

回答結果はサーバー上でプログラムにより自動的に統計的処理がなされ、管理者がオンライン上で分析結果をみることができる。結果データは、表 2⁽¹⁴⁾の通り、17 のスケールで測定され、それらのスケールは理論・概念で 7 つ (I ~ VII) の領域 (domain) に分けられる。測定は、プログラム前の受検結果 (T1) と、プログラム後の受検結果 (T2) の差から算出される 5 点以上の差が出ると有意性があるとされる。

Aggregate Profile の結果を見ると、17 のスケールそれぞれで、全体平均値が 100 点満点で表されており、50 ポイントを平均としている。その中の、Consistency と Congruency は結果自体

表 2

I 形成的指標 (Formative Variables)	
スケール 1	人生におけるネガティブな出来事 (Negative Life Events)
II 中核的欲求の充足度 (Fullfillment of Core Needs)	
スケール 2	欲求の抑圧 (Needs Closure)
スケール 3	欲求の充足度 (Needs Fulfillment)
スケール 4	アイデンティティの拡散 (Identity Diffusion)
III 不均衡の許容 (Tolerance of Disequilibrium)	
スケール 5	基本的な開放性 (Basic Openness)
スケール 6	自分に対する確信 (Self Certitude)
IV 批判的思考 (Critical Thinking)	
スケール 7	基本的な決定論 (Basic Determinism)
スケール 8	社会情動的一致 (Socioemotional Convergence)
V 自己とのかかわり (Self Access)	
スケール 9	身体的共鳴 (Physical Resonance)
スケール 10	感情の調整 (Emotional Attunement)
スケール 11	自己認識 (Self Awareness)
スケール 12	意味の探究 (Meaning Quest)
VI 他者とのかかわり (Other Access)	
スケール 13	宗教的伝統主義 (Religious Traditionalism)
スケール 14	ジェンダー的伝統主義 (Gender Traditionalism)
スケール 15	社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)
VII 世界とのかかわり (Global Access)	
スケール 16	生態との共鳴 (Ecological Resonance)
スケール 17	世界との共鳴 (Global Resonance)

の妥当性の指標であり、7~8割の点数があることが望ましいとされている(東矢・當間 2019)。なお、本調査の対象となっているプログラムでは、Consistency と Congruency がすべて 8割程度であったため、分析するのに妥当な数値であると言える。また、Aggregate Profile Contrastの結果を見ると、上位群(Highest)、中位群(Middle)、下位群(Lowest)のスコアや変化もみることができる。

2.4 BEVI の分析対象スケール

本論文では紙面の都合上、上記の 17 のスケールの全てを扱うことはできない。そのため、グローバル人材に必要な要素の中で著者らが特に関心を寄せる(Ⅲ)「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に大きく関連する項目である 8「社会情動的一致(Socioemotional Convergence)」、11「自己認識(Self Awareness)」、15「社会文化的オープン性(Sociocultural Openness)」、17「世界との共鳴(Global Resonance)」の 4 つスケールに絞って分析を行うこととした⁽¹⁵⁾。

スケール 8「社会情動的一致(Socioemotional Convergence)」は、7つの領域のうち「Ⅳ 批判的思考(Critical Thinking)」の領域に入っている。「自己、他者、世界に対してオープンであり、考えている；思慮深い、実用主義、強い意志；自立欲求がある一方で傷つきやすい他者を気遣うなど、世界をオールオアナッシングでとらえない」⁽¹⁴⁾とされている。つまり、自分や他者をよく理解していて、他者への配慮ができる傾向を示す項目であると考えられる。グローバル人材の育成においては、自分と同文化を持つ、あるいは持たないに関わりなく、他者への理解と配慮ができると同時に、自分自身と自文化への理解が深い学生を育成したい。その点で、この項目は留学の成果を測る上で、重要なものの一つである。

スケール 11「自己認識(Self Awareness)」は「Ⅴ 自己とのかかわり(Self Access)」の領域に入っている。「内省的傾向；自己の複雑性を受け入れる；人々の経験、状況の差異を気遣う；難しいまた議論のある思考、感情を許容する」⁽¹⁴⁾とされている。グローバル人材には、課題や問題に直面したとき、表面に現れる文化面などの差にとらわれて判断するのではなく、物事の本質をとらえ、課題解決への道筋を探すという、深い、複雑な思考が求められる。それは、課題や問題に取り組む自分の能力や環境を客観的にみることも必要となる。それで、この「自己認識」の項目もグローバル人材の育成に欠か

せないものと言える。

スケール 15「社会文化的オープン性(Sociocultural Openness)」は「Ⅵ 他者とのかかわり(Other Access)」の領域に入っている。「文化、経済、教育、環境、ジェンダー、国際関係、政治に関する様々な行動、政策また実行について進歩的、オープンである」⁽¹⁴⁾とされている。社会や文化の様々な要素に興味や関心があり、その差異に気づくことができる特質は、グローバル人材には不可避なものである。

スケール 17「世界との共鳴(Global Resonance)」は「Ⅶ 世界とのかかわり(Global Access)」の領域である。「様々な個人、集団、言語、文化について学習することまた出会うことに傾倒している；世界への関与を模索している」⁽¹⁴⁾とされている。変化に富んだ集団や言語に興味を持ち、関わりあう努力をしているかどうかと言う特質は、グローバル人材において最重要な特質と言える。異文化体験を通して、この特質をより伸ばしていきたいと考える。

本論文では、全てのプログラムの参加者、SIU 参加者、KNU 参加者、及び TKU 参加者のグループごとの、Aggregate Profile と Aggregate Profile Contrast における上記 4 つのスケールの T1 と T2 の数値を見て、オンライン留学の効果測定をすることとする。

3. 本調査の測定結果および考察

3.1 「社会情動的一致」の側面

まず、BEVI の 17 の要素のうちの 8「社会情動的一致(Socioemotional Convergence)」を見ていく。オンライン留学の前後でグループごとに見ると、SIU が有意に減少、KNU と TKU は有意に上昇している(表 3)。SIU をフルスケールスコアによる上位群と下位群に分けた場合、上位群は有意に得点が上昇しているのに対し、下位群は有意に減少している(表 5)。

SIU のプログラムは日本人だけでなく他国の学生も参加し、1 クラス 10 人程度の授業で、ディスカッションなどの発話型の活動が多くあったことを考えると、上位群はそのような活動に積極的に参加し満足を感じた上で、自己・他者に対する理解度が深まった傾向があるのに対し、下位群は元々留学の特性が高くない状況で、英語でのディスカッションなどに能動的に参加できず、自分を含めたクラスメイトへの積極的な見方ができなくなった傾向にあると考えられる。KNU は韓国語をレベル別に分けることなく、大人数で講義や現地学生との交流が行われたこと、またプログラム前から韓国に好感を持っている学生たちであったことなどの要

因で、自己・他者への理解度が全体として上昇したと思われる(表3・表6)。

一方、TKUは上位群が有意に減少、下位群が有意に上昇している(表7)。TKUのプログラムは中国語(特に繁体字)学習のものであり、英語に比べてマイナーな言語に興味があり、しかも休み中に参加すると言う、かなり海外及び留学に関心のある学生と思われる。そのような中での上位群の学生にとって、今回のプログラムは自己と他者、社会への理解を十分に深めるものとはならなかったことがわかる。他方、下位群の学生の得点は有意に上昇していることから見て、まだ留学や外国人との接触が少なく留学へのレディネスが低い学生にとっては、他文化や自文化への理解を十分に促すことのできるプログラムだったのではないかと想像できる。

表3

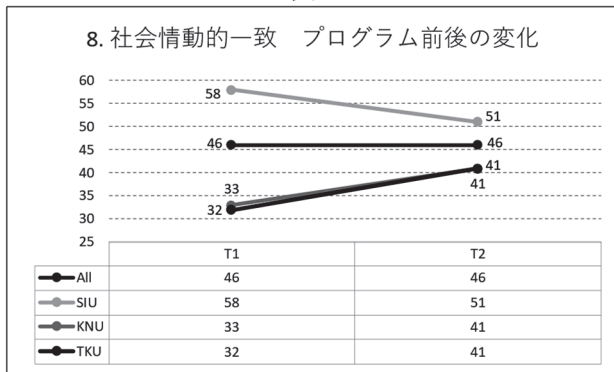


表4

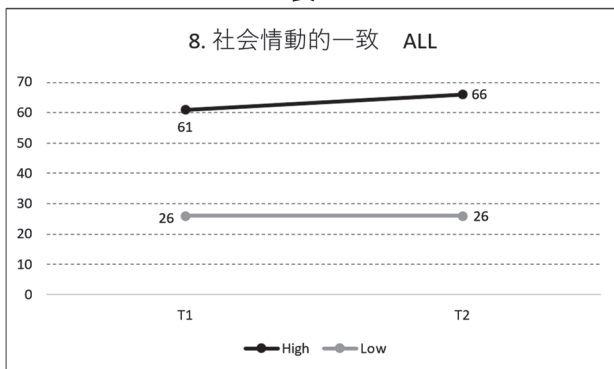


表5

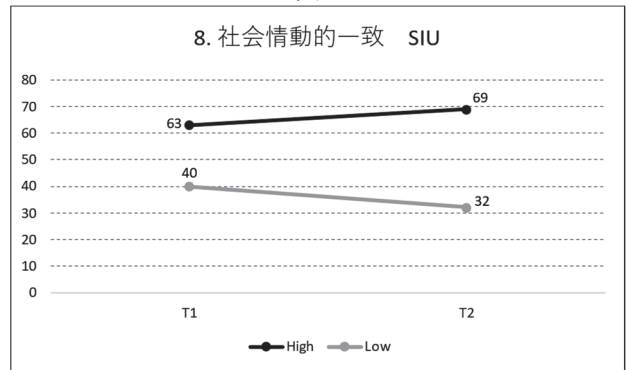


表6

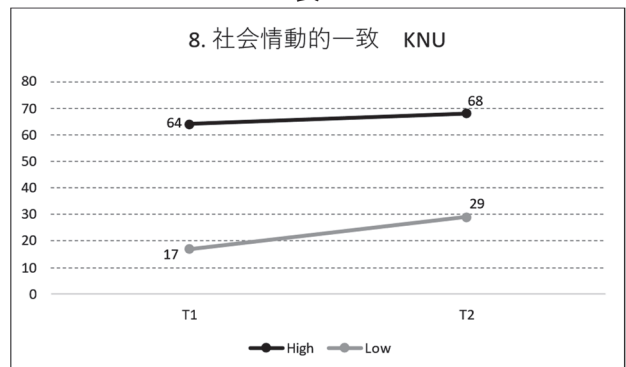
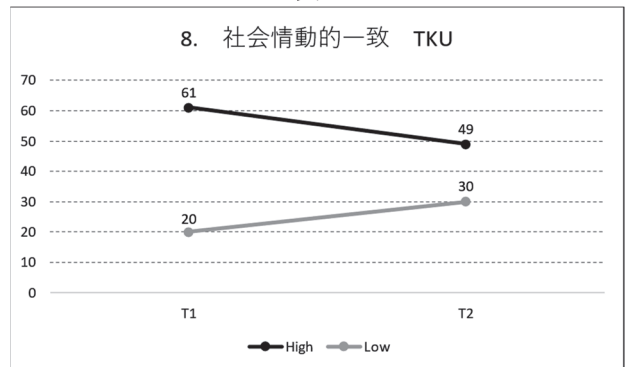


表7



3.2 「自己認識」の側面

次に BEVI の 17 の要素のうちの 11「自己認識 (Self Awareness)」を見ていく。残念ながら、今回のオンライン研修では有意な得点の上昇が見られなかった(表8)。有意に得点が減少した群もあった(表9～表12)。深く考え、物事の本質に目を向けると言う点を考えたとき、オンライン学習の限界が見えるのかもしれない。オンラインのコミュニケーションはあくまでも画面上、2次元のものであり、海外の人とオンラインで会話したとしてもパソコンのスイッチを切れば、すぐさま日本の自分の生活環境に戻る。実際に海外に留学すると、外国人と話し、異文化に触れ、自分の部屋に帰った後でもいろいろ考えたり、悩んだり、落ち込んだり、喜ん

だり、といった経験をし、さまざま思考と感情に自ら触れることができる。オンライン留学では、このような経験が非常に限られる。そして、オンライン留学での異文化体験を期待した分、思ったほど思考や感情に影響がないことに気づき、得点が低下したのかもしれない。自宅で気軽に体験できるオンライン留学の短所を洗い出し、この点での改善が必要だろう。

表 8

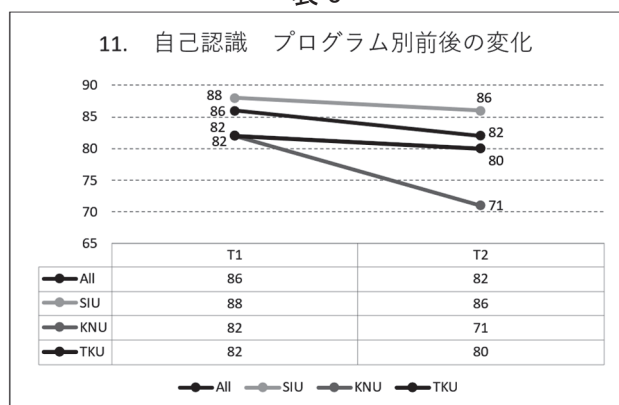


表 9

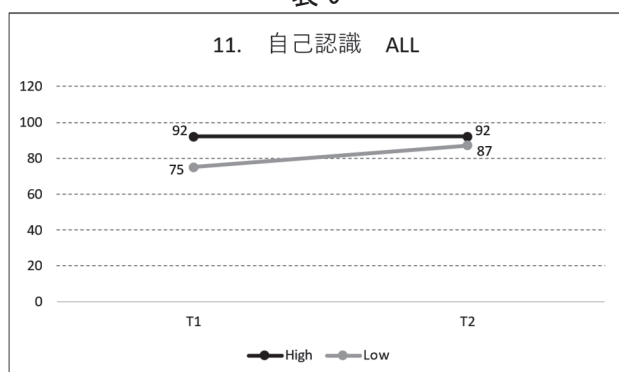


表 10

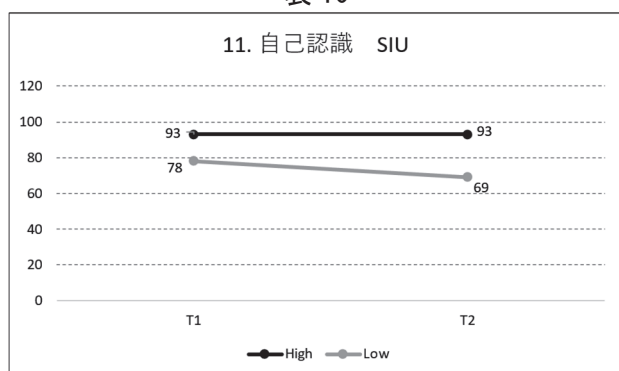


表 11

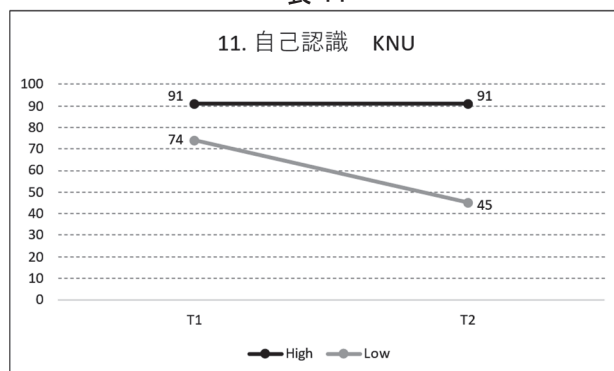
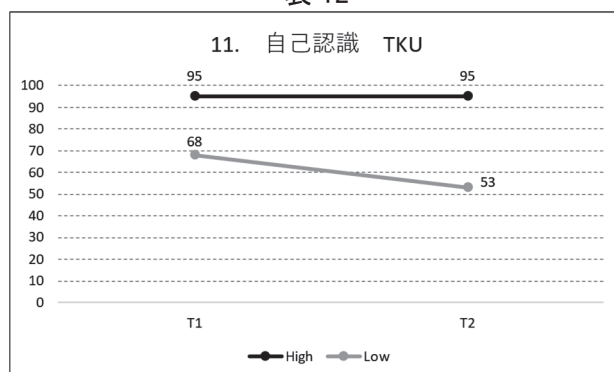


表 12



3.3 「社会文化的オープン性」の側面

次に、BEVIの17の要素のうちの15「社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)」を見ていく。今回のオンライン留学の参加学生は、参加前 (T1) からこの得点が非常に高く、留学前後での変化は見られない (表 13)。TKUの上位群は下降しているものの (表 17)、全体的に高得点を維持し、KNUの下位群も57→70と大幅に増加しており (表 16)、社会文化的オープン性においてプログラムは効果的であったと考えられる。しかしながら、問題なのは今回のオンライン留学に参加した学生が全体的にもともと社会や文化に関心のある人たちだったということである。大学に進学した学生が全て「グローバル人材」となる必要はないだろう。しかし、自国・自文化においても文化や経済、ジェンダー問題に関心を持ち、課題解決に向けて思考を働かせることが求められるべきで、大学はそのような思考パターンを身に付けさせたいと考える。実際に海外に行くほど積極的な関心がない学生に対して、そのような学生だからこそ、抵抗感の低いオンラインでの海外体験をさせ、社会文化的オープン性を伸ばしていきたい。今後のオンライン留学の対象学生を考える際の、良い指針となった。

表 13

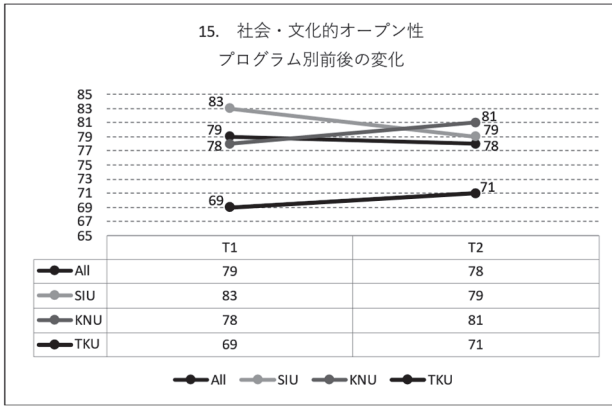


表 17

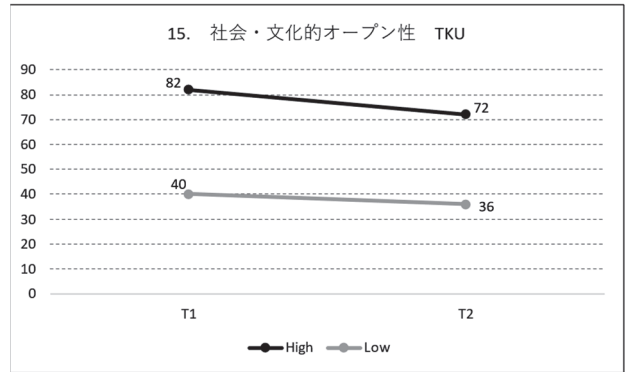


表 14

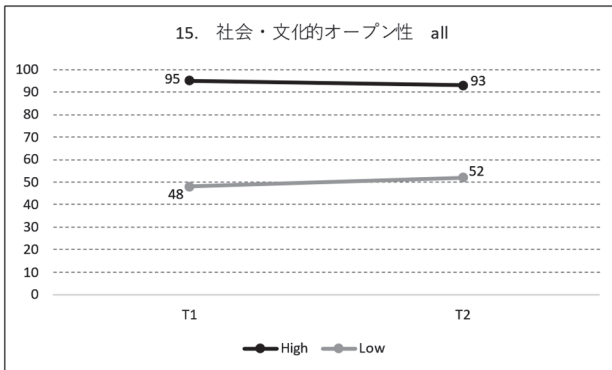


表 15

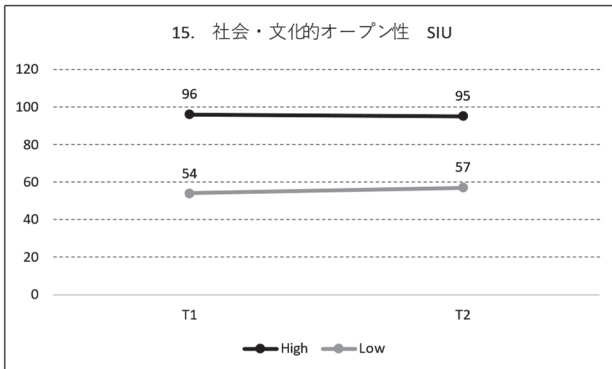
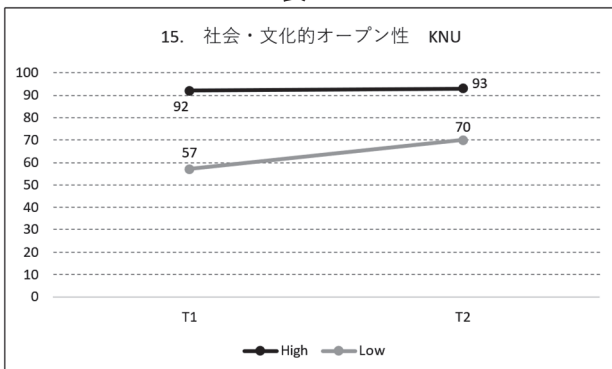


表 16



3.4 「世界との共鳴」の側面

最後に BEVI の 17 の要素のうちの 17「世界との共鳴 (Global Resonance)」を見ていく。この項目でも、15「社会文化的オープン性」と同じようなことが言える。参加した学生はもともとこの得点が高く、下位群の学生が得点を大きく伸ばしている (表 19・表 21・表 22)。オンライン留学であっても、より異文化・多言語に触れたいという意欲が高められたと考えられる。そして、15でも考察したように、もともとこの特質が低い学生たちにどうアプローチし、それらの学生たちの意欲を高めるのが課題となる。同時に、すでに世界との共鳴と言う特質を十分に持っている学生たちに対しても、一層の意識・意欲向上を目指すとしたら、どんなプログラムを提供すべきかも考えなければならない。オンラインであれば、もっと能動的に関わるような活動を用意するなどの改良が必要だろう。

表 18

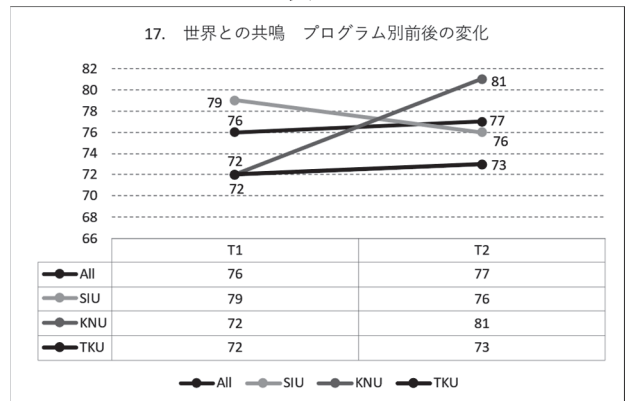


表 19

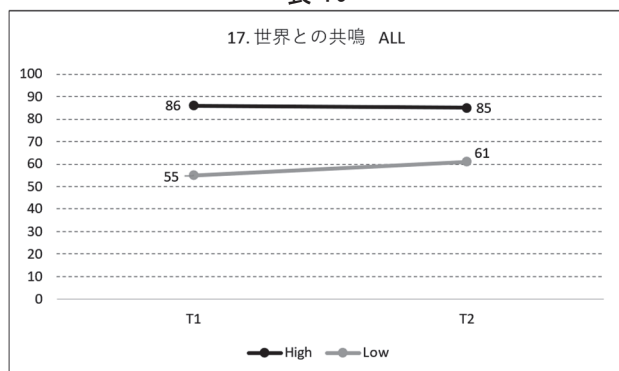


表 20

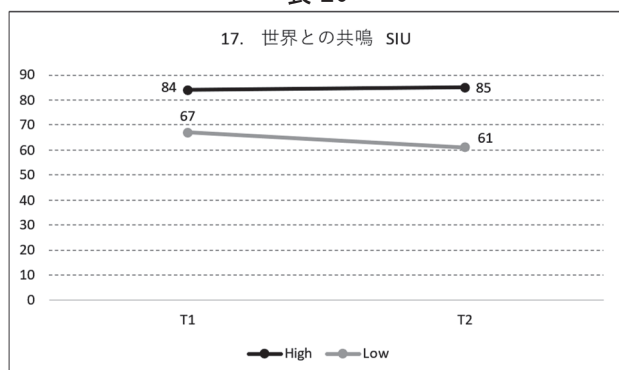


表 21

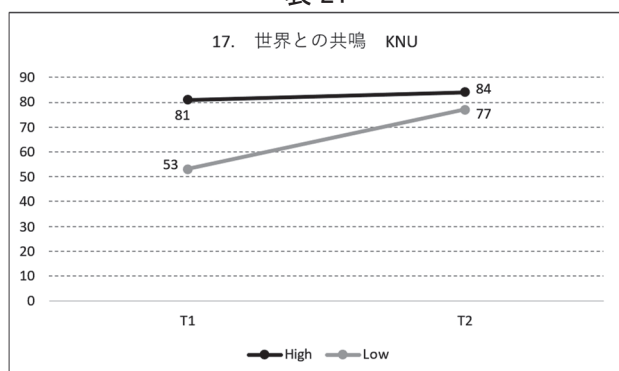
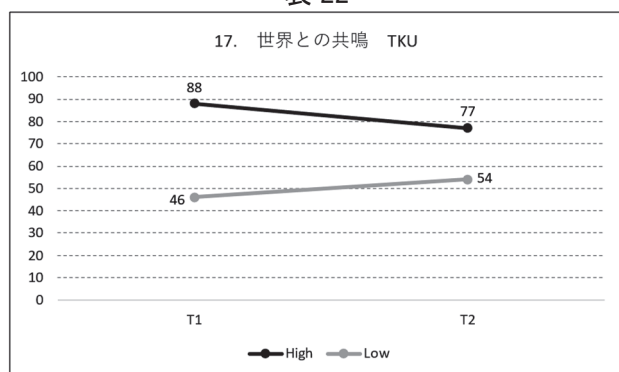


表 22



4. 今後の課題

コロナ禍で夏休みに先駆的に取り組んだオンライン留学であるが、「本調査の測定結果および考察」で述べた通り、グローバル人材育成という観点から、バーチャル空間で行う留学には一定の効果があることが明らかになった。一方、オンラインでの学習・交流の限界も見えた。オンライン化は様々な方面で急速に進み、今後さらに加速する超スマート社会 Society 5.0において、グローバル人材教育はどうあるべきかを捉え直す時にきている。

人々の国際的な移動を前提にした教育の枠組みとして「オンライン留学」をニューノーマルの新たな教育モデルとして位置付けるかべきかを議論していくために、オンライン留学の意義の再検討が必要だろう。コロナ禍における国際交流活動の鈍化によるグローバル教育の質低下を避けるためにも、本研究で明らかになった種々の課題にいち早く取り組んでいきたい。

手軽さや時間的・経済的な負担軽減がサイバー空間の国際交流の極めて大きなメリットであるが、オンラインであったとしても、学生が異文化の学生との交流を通して、物事を深く考え、本質に目を向けるような意味のある交流ができて初めてグローバル教育と言える。オンライン学習に限界があるのであれば、リアル空間を混ぜたハイブリッドな国際交流のモデル構築も改めて考えていかねばならない。英語ディスカッションなど形式的な不慣れによる足かせは、リアル空間での事前英語指導を通じて改善は可能である。

また、世界や異文化に興味を持つ社会文化的オープン性の高い学生だけでなく、その特質の低い学生たちへどうアプローチしていくか、この点も重要な課題である。あらゆる層の学生をターゲットにニューノーマルな時代を生き抜くレジリエントなグローバル人材を育成していくのであれば、この点を議論していくことも必要だろう。

本研究を通じて、本来の「留学」というリアル空間の体験型の異文化理解活動についても間接的に論じることができたが、グローバル人材教育の観点におけるバーチャル空間での留学との比較も、オンライン留学の意義の再検討をする上で不可欠である。オンライン留学プログラムの改善を BEVI の測定をもとに進めていく一方で、実際の短期海外派遣のプログラムの効果についても BEVI で測定を行った上で、今後両者を比較していきたい。

注：

1. BEVI の詳細は本論文で後述するが、BEVI 以外にも、留学の効果測定をするテストとして、IDI (Intercultural Development Inventory) や GPI (Global Perspectives Inventory) も挙げられる。
2. オンライン留学は、バーチャルに海外の学生と繋がって課題解決型のプロジェクト等を行う COIL (COllaborative Online International Learning) とは区別される。本論文では、オンライン留学を、「一定期間オンラインで海外大学の授業を受けたり、海外大学生と交流を行う国際交流プログラム」と定義する。
3. 徳島大学インターナショナルオフィスは、以下の HP の通り、アメリカ、韓国および台湾の大学と連携して、海外派遣の代替として、夏休みに 2 週間から 4 週間のオンライン留学プログラムを開発・実施した (<https://www.isc.tokushima-u.ac.jp/2020summer-online-language-courses/>) (2021 年 3 月 1 日参照)。
4. 徳島大学インターナショナルオフィスでは、2020 年度夏休みに淡江大学 (台湾) と連携して実施したオンライン留学 (2 週間) の効果を BEVI で測定し、その一部を「第 16 回大学教育カンファレンス in 徳島」で口頭発表している (「オンライン海外留学の実施と効果の検証-BEVI および事後アンケートによる分析-」(清藤・橋本 2021))。
5. 南イリノイ大学 (Southern Illinois University) は本学の協定大学である。プログラムの共同開発には、英語センターの CESL (Center for English as a Second Language) (<https://cesl.siu.edu>) がいち早く柔軟に対応した。CESL の英語プログラムには、コロナ禍以前には毎年本学から学生たちを複数派遣している。
6. ニーズ調査は、2020 年 6 月に本学の全学生を対象に Microsoft の Forms を用いて実施している。
7. 韓国の慶北大学 (Kyungpook National University) (<https://cn.knu.ac.kr/main/main.htm>) は本学の協定大学である。オンライン留学の共同開発を行った後、他大学にも参加を呼びかけた。コロナ禍以前には KNU 主催の夏休み短期留学プログラムには毎年本学学生は複数参加している。
8. 台湾の淡江大学 (Tamkang University) は協定大学ではないが、中国語センター (<https://www.clc.tku.edu.tw/?lang=jp>) がオンライン留学プログラムの共同開発に応じて、本学独自のプログラムを作成した。2020 年度の春休みには、このプログラムをベースに他大学も参加できるものへと発展させて実施予定である (2021 年 3 月 1 日現在)。
9. ZOOM は、テレビ会議のように映像と音声を使って、オンラインで同時に複数の相手とコミュニケーションが取れるクラウド型のツールである (<https://zoom.us>)。教育機関に限らず、コロナ禍で対面でのコミュニケーションが閉ざされている中、幅広い分野で使用されている。
10. 淡江大学のプログラムでは、毎日 1 時間学生交流を行なったが、TKU の学生が「教える」という立場での交流であったため、一般的なフラットな関係性での学生交流とはなっていない (「オンライン海外留学の実施と効果の検証-BEVI および事後アンケートによる分析-」(清藤・橋本 2021))
11. 淡江大学のプログラムでは、受講クラスの数によって授業料が異なる。本学から 7 名の学生が参加したが、初級クラスは各 3 名の 2 クラスで授業料は約 6 万円、上級クラスは学生と講師のマンツーマンで授業料は約 8 万円である。
12. 徳島大学には、総合科学部、医学部、歯学部、薬学部、理工学部、生物資源産業学部がある。通常の海外派遣プログラムには医歯薬からの参加者は少ない。長期休暇中にも実習等があり、海外渡航が難しいからであると考えられる。一方で、今回の SIU のオンライン留学は夜開催であるため、実習等が昼間にある学生も参加しやすかったのではないかと考えられる。
13. BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) の日本語版は以下のサイトからログインして受検できる。
<http://jp.thebevi.com/test-admin/>
14. BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) の日本語版 (<http://jp.thebevi.com/test-admin/>) の受検結果の「BEVI のスケールの解説と解釈」を引用している。
15. 永井 (2018) では、グローバル人材の〈要素Ⅲ〉に関わるスケール 11「自己認識」と 15「社会文化的オープン性」に焦点が当てられた分析がなされている。

引用文献

- 大西好宣 (2019) . 短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて. JAILA JOURNAL. 5, 51-62.
- 奥山和子 (2017) . 留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス：質的研究手法を使って (How to form the selfefficacy as the benefit by studying abroad: Adapting qualitative approaches). 大学教育研究, 25: 83-101
- 東矢光代・當間千夏 (2019) . 世界の捉え方に見る学習者の特性とクラス・ダイナミクス:BEVI の結果に基づく分析. 言語文化研究紀要: Scripsimus(28):23-45.
- 永井敦 (2018) .BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析―「グローバル人材」は育成できるのか?―. 広島大学留学生センター紀要. 22, 38-52.
- 西谷元 (2017) . 留学効果の客観的測定・プログラムの質保証-The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)-. 広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書. 137, 45-70
- 文部科学省 (2012) . グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ) . 8 頁
- Beliefs, Events, and Values Inventory (2018). About the BEVI. Retrieved March 1, 2021, from <https://thebevi.com>